

10 月全学院教職員礼拝

主は生きておられる

大学教育学部 清水 禎文

¹⁵わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。¹⁶けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。¹⁷もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。¹⁸もし自分で打ち壊したものを再び建てるのであれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。¹⁹わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。²⁰ 生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。²¹ わたしは、神の恵みを無にしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

ガラテヤの信徒への手紙 2 章 15 節-21 節

本日は「主は生きておられる」と題し、奨励させていただきます。

新共同訳聖書には、見出しがつけられています。ただ今、拝読した聖書の個所には、「すべての人は信仰によって義とされる」という見出しがつけられています。この見出しの言葉を表面的に読みますと、たんなる定義、あるいは定理のように、決まりきった言葉であり、いささか無味乾燥にも思えます。しかし、テキストをじっくり読むと、ここには、パウロの神学の本質ばかりではなく、彼の劇的な人生、深い精神生活が映し出されていることが分かります。また、ユダヤ人たちが苦難に満ちた長い歴史の中で発見した信仰も読み取ることができます。深い悲しみや涙を、喜びに変える豊かな構想力、神を待ち望む姿勢も垣間見ることができます。

本日は、この聖書のテキストから、皆様とご一緒に、宮城学院のまことの創設者であるイエス・キリストについて想いをめぐらせたいと思います。そして、主の不思議な力によって、この時代に、この宮城学院に集められた皆様とともに、私たちに託されたミッションについて考えてみたいと思います。

使徒言行録には、パウロの人生が描き出されています。パウロはサウロという名で呼ばれていました。サウロは使徒ステファノの処刑を目の当たりにした若者として登場します(使徒 8:1)。厳格な律法主義者としてキリスト者の迫害に生き甲斐と使命感を

見出していました。しかしパウロは、ある時、突然、光の体験をします(使徒言行録 9 章 3 節~)。彼は地面に倒れました。そしてイエスの呼びかけの声を聞きました。この体験をきっかけとして、パウロはイエス・キリストの使徒として働くようになりました。パウロはキリスト者を迫害する者から、キリストの使徒に変わりました。そして、かつての仲間である律法主義者たちから、裏切り者として命を狙われる者になりました。

今日の聖書の箇所にも、パウロの個人史から紡ぎ出された言葉を確認することができます。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(19-20 節)。ここには、パウロの深い罪責の念と新しい命を与えられた喜びとが、とてもコンパクトな形で表現されています。

この文章を論理的に読み解こうとすると、まったく理解できないと思います。論理としては破綻しているかのように思えるからです。しかしこの言葉には、紛れもなくパウロの真実が表出しています。自分はすでに死んでいる。しかし、キリストによって生かされている、と。こうした信仰がパウロの人生を支えたのです。

死は人間にとって限界です。しかし、信仰によって人間は死を乗り越えて、生きることができ。そのような生き方は、さらに多くの人々に受け継がれていくものなのです。

ガラテヤ書のテキストを読みながら、旧約聖書の言葉がふと頭の中をよぎりました。それは、旧約聖書のエレミヤ書です。エレミヤ書の中に、そして旧約聖書の中に、繰り返し用いられる言葉があります。それは「主は生きておられる」という言葉です。たとえば、エレミヤ書 4 章 2 節には、次のように書かれています。

もし、あなたが真実と公平と正義をもって
「主は生きておられる」と誓うなら
諸国の民は、あなたを通して祝福を受け
あなたを誇りとする。

「主は生きておられる」という言葉は、エレミヤ書の中でも、繰り返し用いられています。旧約聖書の中では、47 回使われているそうです。

この言葉は、定型的な誓いの言葉と言ってよいでしょう。しかし、たんなる記号としての言葉ではありません。この世の力によって支配される現実の世界から、恵みによる信仰の世界への転換を促す言葉です。私たちに新しい生き方への転換を促す言葉です。信仰告白とも言えるでしょう。

今日のテキストにあるパウロの言葉「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」は、私たちにとって理解しにくい言葉かもしれません。しかし、この言葉は、旧約聖書の中を貫いて流れてきた誓いの言葉であり、信仰告白の表現でもあるのです。

さて、私たちの現実の世界に戻りたいと思います。宮城学院はまもなく創立 140 周

年を迎えます。そのための準備も進められています。140 年という長い歴史の中には、本当にいろいろな出来事がありました。『天にみ栄え』や資料室が毎年出版している『信・望・愛』には、新しい資料に基づく論文が掲載され続けています。それらに目を通すと、140 年の歴史は決して平坦な道ではなかったことが分かります。

先週の大学祭で「なぜ、今、女子大か？—女子大の意義を再考する—」という企画がありました。4つの個人発表とグループ発表がありました。いずれもよく練られた発表でした。長谷部学長からは、甲乙つけがたいプレゼンテーションだったとの講評をいただきました。また、中高の平林先生からは、感激なされたようで、報告者に親しくお声がけをいただきました。

じつは 8 人の報告者のうち7人は私の授業を受講している学生でした。なかには「宿題は出した方がいいかな」「授業はあまり休まないでね」と言いたくなる学生さんもいました。私の授業で見せてくれる姿とは、まったく違う姿に驚きを禁じ得ませんでした。学生の持つ潜在的可能性の高さに気づかずにいた自分を、深く反省させられる機会となりました。そして「一体、どういう授業をやっているんだ」と自責の念もこみ上げてきました。恥ずかしい思いがいたしました。

このように宮城学院で青春を謳歌している学生がいる一方で、さまざまな困難な課題を抱えている学生もたくさんいます。皆様もそのことを感じ取られておられることと思います。この宮城学院の中で、自分の居場所を感じられない、安心・安全な環境・雰囲気がない、と感じている学生もいます。あるいは自己肯定感の低い学生もいます。ひょっとしたら、その原因の一端を担っているのは、じつは私たち自身かもしれません。

私たちは、宮城学院での生活を楽しんでいる学生にも、またそうでない学生にも、生きていることの実感、生きることの素晴らしさを伝えたいと思います。一人ひとりの学生に寄り添い、その学びと成長を支えていきたいと願っています。その原動力となるのは、私たちではありません。究極的な根拠は、聖書の中で出会う神が、私たちに語りかけくださる信仰の世界です。聖書に書かれた言葉が、私たちに新しい命を与えてくれる。そして宮城学院に集う子どもたち、生徒たち、学生たちの心を温める力になるのです。

今日は、「主は生きておられる」という説教題で奨励させていただきました。パウロの確信、それはパウロ自身の個人的な、不思議な体験——キリストの光に照らされて徹底的な回心の体験——によるものでした。また、旧約聖書の中に脈々と流れてきた信仰告白についてお話しさせていただきました。私たちもまた、パウロやエレミヤにならい、日々自分自身を新たに、「主は生きておられる」というメッセージをしっかりと受けとめ、共有して参りたいと思います。そして、宮城学院が次の 10 年、いや次の 100 年につながるように、こども園の子どもたち、中高の生徒たち、そして大学生たちに向き合っていきたいと思います。

祈祷

恵みと愛とに富み給う御在天の父なる神様

秋の深まりつつあるこの時、月に一度の教職員礼拝を守ることができました。感謝いたします。本日はパウロ書簡を基にして、信仰の学びをいたしました。足らざる奨励ではありましたが、どうぞここに集う私たちが、パウロの「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」との言葉、またエレミヤの「主は生きておられる」という誓いの言葉を、深く心に刻むことができるようにしてください。

宮城学院には、こども園、中高、大学に 4000 人を超える子どもたちが集っています。その一人ひとりが、自分らしい生き方を求めて、生活し、学んでいます。私たちが子どもや生徒たち、またその背後におられる保護者の方々からの委託に十分に応えられるようにしてください。

私たちは、力弱い者であります。また心も吹く風のごとく定かならないものです。しかし、聖書の信仰によって私たちを強め、支えてください。そして、宮城学院に集う子どもたち、生徒たち、学生たちに対して、愛のわざに努めることができるように、確かな奉仕ができるように変えてください。

この足らざる祈り、ここに集いし、お一人お一人の熱き思いとともに、御前に捧げます。アーメン。

(2024 年 10 月 16 日)